

龍谷大学世界仏教文化研究センター  
2016年度公開研究会

2017年1月22日(日) 学術講演会

「華嚴の世界—『華嚴経』と南方マンダラー」関連レクチャー

講演名	明恵の華嚴思想と『夢記』
開催日時	2016年12月2日(金) 13:15~14:45
場所	龍谷大学深草学舎和顔館アクティビティホール
講演者	野呂靖(龍谷大学文学部仏教学科専任講師)
司会	唐澤太輔(龍谷大学世界仏教文化研究センターPD)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	25人

【講義のポイント】

日本仏教、南都仏教、そして華嚴思想がご専門の野呂靖氏によって、明恵の人となり、四法界説、そして明恵が夢を記録し続けた理由に関するレクチャーが行われた。野呂氏は、本レクチャーを通じて、明恵の人生と思想に通底する事柄は「別れと出会い」「喪失と邂逅」、つまり相反するものの共存であると主張した。

【講義の概要】

■はじめに

明恵が生きた時代は、源平の争乱、南都焼討など、まさに人々の間に「末法」「法滅」の意識が高まった時代であった。そのような時代において、明恵は、東大寺への出向、後鳥羽上皇から託された高山寺の経営などを通じ、華嚴教学の復興を志した。明恵は、一生にわたり厳しく戒律を護り通したと言われている。また、自身が見た膨大な夢を記録し続けた。そして『摧邪輪』などを通じ、法然の浄土教への批判なども行った人物としても知られている。

■明恵の喪失

明恵は、幼くして両親と死別した。彼は、両親のことを忘れることは片時もなかったという。また明恵は、慈父(釈尊)から捨てられたと述べている(『随意別願文』)。そして明恵は、釈尊と同じ時代に生まれ、釈尊と出会うことができなかったのは、自分の咎(過ち)のためであると考えていたという。

両親、釈尊との別離は、明恵に絶望感を与えた。しかし同時に、仏眼仏母像に母を映し(母性を見出し)、『華嚴経』の教えを学び実践することを通して、釈尊の「現在性」を実感していた。つまり、明恵にとっては、両親あるいは釈尊は、事実としては別れてはいるが、本質的には別れてはいなかったのである。この事柄は、明恵という人物を紐解くための重要なキーワードである。

#### ■ 明恵が向き合った華嚴思想とは何か

『華嚴経』は、5世紀初頭に中央アジアのコータン周辺で集成・成立したと言われている。そのユニークさは「釈尊による初めての説法」とされている点であり、また「海印三昧」(海のように広大で深い瞑想)に入った状態で行った説法だとされている点にある。華嚴宗では、釈尊による初めての説法(初転法輪)以前の説法が実はあり、その中にこそ釈尊の悟りの根本内容が示されていると考えられているのである。

中国の華嚴宗では、時間・空間を越え、無限につながり合い、個性を保ちつつも、さまざまあうことなく融け合っているとする、究極的な縁起(法界縁起)の世界が重視された。

全体は部分に含まれ部分は全体に含まれている、この事柄は、華嚴思想を理解する上で非常に重要である。野呂氏は、家(全体)における柱(部分)を事例に解説した。家は柱なくしてはありえず、柱は家なくしては柱ということとはできない。つまり、家が家であるためには柱が必要で、柱が柱であるためには家が必要なのである。それは言い換えるならば、柱(個)の中には家そのもの(全体)が含まれているということである。

#### ■ 仏教における夢の捉え方

『スッタニパータ』においては、釈尊が夢占いをやめるべきと述べたと記されている。また、『善見律毘婆沙』には、夢は、前世において自身がどのような事柄を行っていたかを知るものである(前世において良い行いをしていれば「善夢」を、罪を犯していれば「悪夢」を見る)ことが記されている。さらに『摩訶止観』では、五蔵の病など、表面上なかなか分からない体調不良なども、夢を通して知ることができることが述べられている。

#### ■ 明恵の夢が意味するもの

明恵による「夢記」は、19歳～58歳までのものが現存している。それは、明恵の人生の大半の覆うほどの分量である。野呂氏によって、『夢記』に、実際にどのような事柄が書かれているかについて解説がなされた。

次のような夢の記録が事例としてあげられた。—空から筒のようなものが降りてきて、明恵はそれに取り付いて天に至った。筒の上の宝珠から清浄な水が流れてきて、明恵の全身を覆った。そして体は明るい鏡のようになり、「諸々の仏がことごとく中に入っている。汝は今、清浄となった」という声がした。野呂氏は、これは明恵にとって「滅罪の確認としての夢」であったと解釈する。

他には、次のような夢がある。—死人がいるのを飛び越えようとしたが、恐怖を覚えて越えられなかった。後日、同じ夢を見たが、今度はこの死人の上を飛び越えることができた。これは明恵が、「老死」という人間にとっての最大の苦を乗り越えたということだとも考えられる。野呂氏は、これを「仏教教義を体験する夢」だと解釈する。

## 【まとめ】

明恵を「定義」すること、また華嚴思想を「理解」することは、大変難しい事柄である。しかし、そこに一本の補助線を引いてみると、はっきりと見えてくるものがある。それは、あらゆるもの同士「つながり」であり、相反するもの同士の「共存」である。明恵においては、別れと邂逅は常にともにあった。華嚴思想においては、個と全体のみならず、個と個も相依相待し、さまたげあうことなくつながりあっているのである。明恵の在り方と華嚴の教えは一致する。明恵は、まさに「華嚴の教えに生きた人」だったと言えるであろう。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センターPD 唐澤太輔